

墨の一部はバイエリッシェワルド産のものが用ひられてゐるに過ぎない。鉛筆工業は多くの補助機械工業を起した。金屬箔工業も一部分は鉛筆工業の補助工業である。ニュルンベルグの工業地域を簡単に概観すれば、此處では非常に多種の工業が存在し、その工業の多くは獨逸の他の地域では稀であるか或は全く見られないものであることを確かめることが出来た。

ニュルンベルグの工業地域の北にバムベルグのそれが接續してゐる。此處では木綿工業が盛である。バムベルグの紡績工業地域はバイエルンのポークトランドのそれと密接な關係に在る。

オーベルパルツには一小重工業地域がある。その基礎は褐炭と鑽石である。褐炭は直接精鍊には使用されぬが、精鍊作業に必要な電流を供給する。骸炭はウエストファーレンから送られてくる。

既に述べたところの地域を除いたバイエルン

は殆ど全く農業的であると言つて良い。只都市には多少消費指向的な工業が存在する。就中ウエルツブルグ (Wurzburg) とシュワインフルト (Schweinfurt) はその機械工業で著名である。
(未完)

新著紹介

○東海道路路調査報告書 關西道路研究会編

四六倍判 二〇六頁 大阪市東區今橋日本ポルトラ

ンドセメント同業會發行 三月 定價一圓五〇錢

本書は昭和九年十一月二日より四日に亘り舉行した關西道路研究會主催東海道路大阪東京間自動車調査旅行に於ける調査事項を整理編纂したもので東海道及各都市の道路の狀況を示した多くの地圖が附載されてゐる。自動車による旅客及貨物の運搬が國民の生活に緊切な影響を有するに至つた現在では東海道の交通運搬は獨り鐵道にのみ依據するを得なくなつた。従つて昔の大海道であり然かも一時は交通の衰微した東海道國道は再び蘇生して活氣を呈するに到るべきであるのに自動車交通路として鋪裝の完備された部分が大阪東京間の總延長五六九軒九中延長二四二軒一で僅に約四三%にしか達してゐない現状を調査するのは將來の交通政策上甚だ意義があ

ることである。本書の大部分は内務技師江守保平氏・京都市技師貝原榮氏・大阪市技師吉川至道氏・元京都府土木部長村山喜一郎氏・大阪府土木部道路課長坪井豊彦氏・京都帝國大學教授近藤泰夫氏・名古屋高等工業學校教授大崎虎二氏・大阪帝國大學助教授前田利一氏等の道路・橋梁・隧道・鋪裝・鐵道交叉・並樹・自動車交通量・貨物及乗客運輸等に關する調査を記述すると共に昔の東海道・東海道自動車旅行に關する談話を掲載して硬軟兩様の記事に満ちてゐるのは交通地理の資料を供する許りでなく興味ある讀物となつてゐる。海に地理學家の一顧に價するものと言ひ得る。(S)

○樂土南洋

中上川蝶子著 南光社出版 定價二圓五十錢

武藤山治氏の令嬢である蝶子夫人は父君の危病にかゝられた日より僅か五日程の前に十二月十六日から三月五日まで百八十日あまりの南洋の旅から歸られたので、無事の歸着を電話で父君に告げられて五に言葉交はしたが、それが最期の語らひになつた、父や母の恵で南洋へ弟や嬢と共に旅立つたので、いろ／＼の御土産話も山ほどあつたのを、遂に一言も直接に御耳に入れることが出来なかつた、何とはかない電別であつたことかと思はるゝまゝに、その日記をこゝに公刊して一は父君への靈に手向け、一は残つてゐられる千世子母堂へのお慰にもとされたのがこの一篇四六版二七六頁コロタイプ七十四頁といふ美裝である。

勿論著者は地理學者ではないが、現代日本の富豪の女流が

どうした教養をもち、どうした心掛で旅行などをするか、さうして南洋での日本人をいかに理解したかといふやうなことを學ぶ業として、恐らくかうした書籍は外にはないことゝ考へられるので、序文をかいた辻村太郎氏も本書を以て植民地理の研究論文などよりも意外に大きい役割を務めないとは云へないと思はれるのである。筆者は二十年の昔、著者の京都府立第一高等女學校での秀才であつた時代に地理を教へたこともある關係でこの書に對して普通以上の好意がもてるのである。

神戸からスラバヤへ、さてはジャガタラからスマドラのメダン。ペナンからバンコック、アンコルワットからサイゴン、サイゴンから香港への道程、天女の昔我等の祖先がまつさきののりだした御朱印船の故跡を逆まわりに女でも樂々と往復の出来る新しい大御代に恵まれて、のびのびと楽しい見物旅行一篇、これこそ今の世の日本の上流社會の人々に見習はしめる此上もないよい手引であらうと考へて敢て一般の人々の閱覽をすゝめる。(藤田)

○造瓦

島田貞彦著 岡書院發行 定價一圓五十錢

旅順博物館主事である考古學の島田貞彦君の近著として四六版七八頁圖版三十二頁の造瓦が出た。我國上古瓦舍獎勵の歴史から始めて、古瓦研究の近代の收穫を明にし、窯業史の條下に山城幡枝の窯跡、京都北白川の窯跡、大和三井新田の瓦窯跡などを説明し、其出土品を詳にしたのち、朝鮮現陶窯

の實際を語り、平窯と登窯を論じ現今の瓦としての平瓦・巴瓦・唐草瓦・筒瓦、さては琉球の造瓦に及び、京都泉涌寺の瓦工を紹介し、造瓦上の文献又は一般資料として興味ある説明を付し、古瓦の文様と特質を明確に述べられておちゆる場合の圖版が揃へられてある。誠に古瓦蒐集の業ともなると同様に造瓦のテクニクを知らんとする人にこの上なき指針ともなるであらう。文章も圖版も共にあくぬけのした立派な趣味の文献と見て江湖に推薦したい。(藤田)

雜 報

○故小藤文次郎先生著述英文論文及單行本目錄

英文論文

1. Studies on some Japanese Rocks. *Quart. Journ. Geol. Soc. London*. XL, p. 431—437. 1884.
2. Studies on some Japanese Rocks. *Geol. Mag. Serd Dec. I*, p. 238—239. 1884.
3. A Note on Glaucophane. *Journ. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo*. I (Pt. 1), p. 85—99. 1886.
4. Some Occurrences of Piedmontite in Japan. *Journ. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo*. I (Pt. 3), p. 303—312. 1887.
5. On some Occurrences of Piedmontite-Schist in

- Japan. *Geol. Mag. Serd Dec. IV*, p. 330—331. 1887.
6. On some Occurrences of Piedmontite-Schist in Japan. *Quart. Journ. Geol. Soc. London*. XLIII, p. 474—480. 1887.
7. On the so-called Crystalline Schists of Chichibu. (The Sambagawan Series). *Journ. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo*. II (Pt. 2), p. 77—141. 1888.
8. The Archaean Formation of the Abukuma Plateau. *Journ. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo*. V (Pt. 3), p. 197—293. 1893.
9. On the Cause of the Great Earthquake in Central Japan, 1891. *Journ. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo*. V (Pt. 4), p. 295—353. 1893.
10. On the geologic Structure of the Malayan Archipelago. *Journ. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo*. XI (Pt. 2), p. 83—120. 1899.
11. Notes on the Geology of the dependent Isles of Taiwan. *Journ. Coll. Sc. Imp. Univ. Tokyo*. XIII (Pt. 1), p. 1—57. 1899.
12. The Scope of the Volcanological Survey of Japan. *Publ. Earthq. Invest. Comm. in Foreign Languages*. No. 3, p. 89—103. 1900.
13. An orographic Sketch of Korea. *Journ. Coll.*